



センターでは、医師と看護師が患者一人一人の様子について日々、情報共有しながらケアに当たる

8/12 読

「献体」の信念 患者と共有

西原ケイ子さん(86)の容体は、中津市民病院(大分県中津市)の緩和ケアセンターに入る前、かなり悪かった。大腸がんが進行して

おなかに水がたまる症状がひどく、入退院を繰り返した。2015年11月に手術してから3年余り、もう抗がん剤は効かなくなっていた。

「治療ができなくなったらどうする?」。今年2月、がん相談員(当時)の吉田まつみさんがそう切り出したとき、西原さんはこんなことを口にした。「献体の手続きをしたい」

抗がん剤が専門の看護師である吉田さんは、副作用の状態や不安な気持ちに寄り添ってきた。西原さんは前年から、自分が亡くなる時のことについて決意を打ち明けていた。「私は医療にお世話になったから、献体したいと思ってるの」

「献体」は、遺体を医学

生の実習に無償で提供する。提供の意思がある人は、生前に登録する。

スタッフが問い合わせたところ、県内唯一の医学部を持つ大分大は献体を受け付けていなかった。隣の福岡県にある九州大への献体も考えたが、遺体の引き取りは同じ県内だけという。

自宅は、中津市に隣接する福岡県豊前市。いわゆる「おひとりさま」で、親族はいないが、そばで看病できる状況はない。病状から自宅暮らしは難しかった。「最期はかかりつけ医のところでお世話になりたい。献体は私の信念だから」。西原さんは意思を伝えた。自宅近くの施設なら同じ県内なので献体の条件に合う。

かかりつけ医とは親しい間柄で、診療所に併設する介護老人保健施設で受け入れてくれるという。薬による痛みのコントロールなどが

必要ながん患者は、こうした施設への入所は断られるのが一般的だが、特別な計らいのようだ。西原さんは緩和ケアセンターにいったん入り、落ち着いたら施設に移る意向だった。

「療養場所がどこかよりも、献体したい気持ちのほうが強かった。人の役に立ちたいという思いが強い西原さんらしいですね」。吉田さんはそう語る。

近年、諸外国で広がる「アドバンス・ケア・プランニング」。人生の終わりに備え、自らが大切にしていることや、医療・ケアに望むことをあらかじめ考え、周囲の人と共有しておく取り組みだ。厚生労働省も「人生会議」という呼び名をつけて推進している。

吉田さんは、西原さんが語った人生の最終段階に対するイメージを、カルテに書き留めた。「落日の落照のように、輝きながら終えたい」。最期まで、自分らしさを貫く。そんな気持ちが表れていた。